

編集委員が選んだ本

『ヒゲの日本近現代史』

阿部恒久／講談社現代新書／
2013年7月／760円(税別)

戦後の歴史学研究でめざましい進展を見せたのが女性史である。特に女性の髪形や化粧、衣装などの身装史については豊富な研究がある。ジェンダーの概念が定着したことが女性史研究進展の大きな理由であるが、そもそもジェンダーとは社会的・文化的につくられた男女の性的差異である。男性性もまた歴史的に作られたことを思えば、男性の身装の歴史も研究に値するというのが著者の見解である。

本書では、男性にしか生えない「ヒゲ」に着目した。「大ひげ禁令」が出された江戸時代にはヒゲ無しが一般的であったが、明治に入り断髪・洋服とともにヒゲが文明開化の象徴となった。天皇をはじめ官僚や学者、教師などが盛んにヒゲを生やした。ところが大正デモクラシー期を代表する「モボ」にはヒゲがなく、軍国主義の時代に入るとヒゲが復活する。一転して、戦後の高度経済成長の時代を担ったサラリーマンはヒゲを忌避している。著者はヒゲをめぐる状況の変化の要因として、①権力側の働きかけ②外国文化の影響③女性の目線④カミソリなどの器具の発達をあげ、ヒゲがいかに男性性の象徴であるのかを見事に言い当てている。

『和歌の自然歳時記』

阿部泉／つくばね舎／2013年4月／1900円(税別)

長年、高校歴史教育で実物教材から生徒の興味・関心を引き出したの授業を実践してきた著者が退職を機に書き溜めてきた著書である。幼児教育をめざそうとする高校生に伝統的年中行事について話をした際、あまりに体験と知識がないことに危機感を持ったことが動機だという。この本は、古歌を通して古の人々の季節感や自然理解を学ぼうとするものである。たとえば「春の方角」は「東」で「青龍」が守り神。「青春」の言葉もここから生まれてくる。これは周知のように、古代中国から伝えられた五行思想・四神思想の影響である。古墳の壁画に四神が描かれているとか、平安時代の陰陽師が星の動きを観察して占いをしていたこと等は、歴史を学ぶ上で知っておきたい知識である。そうした事例を「春の部」「夏の部」「秋の部」「冬の部」でまとめている。

『新・現代アフリカ入門—人々が変える大陸』

勝俣誠／岩波新書／2013年4月／820円(税別)

「作れず」「買えず」「もらえない」と表現される飢えの構造。せっかく「民主化」したのに、いっこうにおさまらない紛争。

そうした「現実」と格闘し、課題と展望をあぶり出そうとする著者の誠実な態度に打たれた。

前著の見方は楽観的すぎたと自己批判し、「自分が歩いて、見て、会って、考えた」ことを中心に構成され、内発的な改革の芽びきも紹介される。

『本当は憲法より大切な「日米地位協定入門」』

前泊博盛編／創元社／2013年3月／1500円(税別)

本のタイトルを見たとき、抵抗があった。でも、読み始めてすぐ、「このタイトルをつけたくなった気持ち」がわかるような気がした。

日本の航空法令で決められた、人口密集地以外の最低安全高度は150メートルであるのに、普天間基地に配備されたオスプレイは、「平均」150メートルの飛行で訓練を行うという。え？ それって、日本にいる米軍は日本の法律を守らなくてもいい、っていうこと？ しかもその訓練ルートは、沖縄だけでなく全国21県138市町村にのぼり、さらに、「基地間移動」という名目で、事実上、日本のどこでも飛べる……。

こうした「事実」が次々に明らかにされ、後段でその根拠が詳しく解説されていく。

「からくり」という言葉が、何度も頭をよぎり、日本の政治の深奥部をのぞき見る思いにとらわれる。

『柳宗悦—「複合の美」の思想』

中見真理／岩波新書／2013年7月／800円(税別)

「野に咲く多くの異なる花は野の美を傷めるであろうか。互いは互いを助けて世界を単調から複合の美に彩るのである。」1919年に出版された柳の著作『宗教とその真理』の中の言葉である。日本帝国主義による同化政策に抵抗し、非戦を貫いた柳は、朝鮮・台湾・沖縄・アイヌの人々の文化の独自性に目を向け、多民族・多文化が共生する世界の実現をめざした。これらの文化すべてに言及し、高く評価することのできた人物は、戦前においては柳以外に存在しなかった。ソウルの景福宮にある光化門の保存を訴えたことで、教科書や資料集にも取り上げられるようになった柳であるが、その思想の全体像をつかむうえで絶好の書である。領土問題に端を発して、偏狭なナショナリズムが頭をもたげつつある昨今、「複合の美」の持つ現代的な意味も確認したい。

『反・自由貿易論』

中野剛志／新潮新書／2013年6月／700円(税別)

第2次世界大戦は保護貿易体制が原因の1つだった。だから保護主義の貿易体制はよくない——これは正しい理解なのか？ 現在のグローバリズム経済に通ずる自由貿易論。それが大きな社会矛盾を生み出している。自由貿易の限界、TPPへの警戒心の薄い日本政府と大企業の姿勢の問題点は何か。著者が示す「政治的経済的強国が、世界の99%を不幸にする経済。相手国の自主性と民主主義を制限する」は正しい分析か。一読して検討してみたいものである。